

長安の月と土の家と留学生

中 国

中国の旅を終えた暫くは、中国で引いた風邪のせいで耳鳴りがやまず、仙台の学会へも出られない始末。十月半ば、やっと元気を回復したが、旅行前からの山積の仕事が残っていて、印象記を書く余暇を見い出すことができず十月が過ぎた。そして十一月も終りに近い頃、かつてとった写真やテープなど整理しながら、印象記の構想を練ろうと思っていた矢先、東京の渡部先生からのお便り。写真一葉とそれに前回訪中なされた折の印象記「中国の旅」とが同封されていた。真に美しい文章。まるで中国の山河を目のあたりに見るようなすばらしいタッチ。私はもう印象記を書く意欲も自信も失ってしまった。そして今日は原稿締切の十二月二日。しかたなく重いペンをとった。

天

華清池からの帰り路、私達は乗ってきた自動車の故障のため、夕暮から、光も音もない関中大平原に放置されたのだが、折しも西安の街に三日月がのぼってきた。まさに李白と共に「長安一片の月」を望む思いで感慨一入のものがあつた。私は短大の漢文講読にあたり、この「一片の月」について、満月とする説とかたわれ月とする説の二説のおこなわれていることを話してきたが、今後は、或いは「三日月」とする説が長安の夜空には相応し

い、などと勝手な解説を加えるのではないかと恐れている。それ程にあの夜の三日月は印象深いものであった。それにしても、関中の大平原の夜は、月が輝いてはいたが、しかし茫漠たる静寂の世界であって、何か天空に畏敬の念すら感ぜずにはおられない不可思議の世界であった。お蔭で古代人の敬天思想をしのぶ一時を過ごすことができたというわけで、私は自動車の故障に対して感謝しなければなるまいと考えている。

地

関中の大平原は沖積平野であるが、その北方の台地は、厚い黄土におおわれた高原である。このあたり、雨が寡く乾燥しており、寒暑の差もはげしく、産物も豊かではない。人々はこの自然の驚畏にさらされながら忍従の生活を強いられているのだ。乾陵のある乾泉あたりも乾燥した黄土地帯だが、私は乾陵参道近くに穴居住宅の聚落があるのを見た。厚い黄土層を四角に掘り下げてそこを庭とし、庭に面した三方に部屋が造られ、残りの一方が玄関に通じている。大抵、庭にはリノゴの木が一本植えられており、その囲りには鶏や黒豚が遊んでいる。さながら古代中国の生活を目のあたりにした感があった。同行の中村先生のお話しによれば、これは中国人の生活の知恵から生れた居住形態だという。確かに、この厚い黄土の中に部屋をもつ土の家は、夏は涼しく冬は暖かく、また年中部屋の湿度を一定に保ってくれる。自然



万里の長城に立つ

の激しい環境の中から生れた人間の知恵は、自然に逆らわず自然に従って、その恩恵を享けるといふ知恵なのだ。私は、黄土層の中での居住生活に、中国人の自然と調和して生きる姿を見て感動すらおぼえたのである。

人



北京の天壇前で

天を畏れ地に逆らわない調和の生活。それは一見ひ弱な柔順な生き方に思えるが、そこにこそ四千年の歴史を築いてきた中国人の力の源泉を見る思いがするのである。私は帰国の機上で、日本に留学する齡^{よわい}四十余歳の六人の中国人に出会った。文化大革命の中で生き、四人組時代にも逆らうことなく生きてきた彼らは、いま華国鋒体制の中で四つの近代化に向けて静かな闘志を燃していた。私はそのとき彼らの話した言葉が忘れられないで今もなお耳に残っている。

私達は留学生というには余りにも齢をとりすぎています。だが、学者というには力が足りません。これから日本の大学で勉強して、早く日本の文化の水準に追いつきたいと思えます。

自然に柔順な中国人は、また人間世界の流れにも逆うことなく生きようとしている。逆らわずに柔順に生きることによって中国人本来の安らぎの生活そして高度な文化生活が達成されるのであろう。四つの近代化の成る日もさ程遠くはあるまい。

中国研究者友好訪中団『訪中記』（昭・55・2・20）